

きゅうりセル成型苗の直接定植技術

(野菜花き部)

1 背景とねらい

近年、県内各地に大型育苗施設が新たに設置され、野菜花き類のセル成型苗の生産が本格化してきた。きゅうりについては、ロボット接ぎ木によるセル成型苗の大量生産技術が解明され、平成6年より苗供給が開始されている。今後は同苗への依存度はますます高まるものとみられるが、育苗施設の効率的運用、苗生産の省力低コスト化のためにも、接ぎ木活着後ポット上げをしないで、直接セル苗を定植する技術の解明が緊要である。そこで露地作型でのきゅうりセル苗を直接定植した場合の、適応作型と生育特性について検討した結果、成果が得られたので参考に供する。

2 技術内容

1) 適応作型

セル苗の直接定植は、5月以降播種する作型に適用できる。

2) セル直接定植技術

(1) セル苗の定植適期幅は狭く、外観的には茎葉の広がりセル径の1.5倍程度、葉数1.2~1.5枚、草丈10~15cmで、根鉢が崩れない範囲で根巻があまり進みすぎない段階がよい。

(2) 種期別、セル別の育苗日数は概ね以下のとおりである。

1セル容量		5月1日まき	6月1日まき	6月10日まき	6月20日まき
72セル	35ml	19~20日	18~19日	17~18日	14~15日
50	60	22~23	20~21	19~20	16~17
38	90	25~26	22~23	21~22	17~18

* 断根・片葉切断接ぎによる育苗日数

3) 適応地域 県下全域(露地普通栽培)

3 指導上の留意事項

- 1) 72から38セルの中では72セル苗を適期定植する方法が、育苗効率の向上、苗生産コストの低減にむすびつく。しかし、置床期間が短く、定植適期幅も狭くなるので、計画的で確実な苗供給と定植作業の実施が要求される。したがって地域の苗生産供給や生産者の受け入れ体制等の実態を勘案して、苗の大きさを選定する。
- 2) 培養土容量の少ないセル苗は、本畑での地表面の水分・温度等の変動に影響されやすい。活着促進のため、防風対策を講じたうえ、砕土・整地をていねいに行い圃場条件を良好にするとともに、定植後活着までの水分管理を重視する。
- 3) 5月下旬定植の場合、慣行との播種日の遅れを少しでも小さくし、初期収量を確保するため、容量の大きいトレイ(ポット)を使用する。

4) セル苗は慣行ポット苗に比較し、活着後の生育は旺盛となり草勢は良好である。

5) 半促成及び抑制作型等のハウス栽培での適用は、未検討である。

4 成績概要

作型、セルサイズの違いと収量、品質

播種日	処理区		総収量	商品果 収量	同左 対比	果実品質別収量割合(%)					良果率 対比(%)	
	セルサイズ	定植日				良果	曲果	尻太	尻細	くず		黄斑
4/15	ポット12	5/20	1,093	881	135	51	29	2	10	7	1	86
5	ポット9	6/2	799	651	(100)	59	23	3	9	5	1	(100)
/	72	5/21	866	691	106	57	22	1	9	8	1	97
2	50	5/25	917	714	110	55	23	2	12	7	1	93
	38	5/30	848	651	100	52	25	1	11	10	0	88
6	ポット9	7/4	676	552	(100)	58	23	2	10	5	1	(100)
/	72	6/20	746	588	107	48	30	1	7	14	0	83
1	50	6/22	812	638	116	55	24	1	9	12	0	95
	38	6/24	851	645	117	52	24	1	10	13	0	90
6	ポット9	7/7	641	514	(100)	58	22	1	9	9	0	(100)
/	72	6/29	678	570	111	57	27	2	6	8	0	98
10	50	7/1	608	478	93	56	23	2	8	12	0	97
	38	7/1	712	570	111	57	23	2	7	10	0	98
6	ポット9	7/13	571	457	(100)	55	25	0	10	9	0	(100)
/	72	7/7	539	361	79	48	19	3	17	13	0	87
20	50	7/8	558	433	95	59	19	0	9	13	0	107
	38	7/8	593	465	102	57	21	0	9	13	0	104

ポット12：直径12cm、4葉苗 ポット9：直径9cm、3葉苗

《摘要》5月下旬定植の場合、セル苗（5/2播種）はポット苗（4/15播種）より、前半の収量は劣っており、総体の収量は少ない。同一播種日ではポット苗とセル苗の収量差は、はっきりしない。